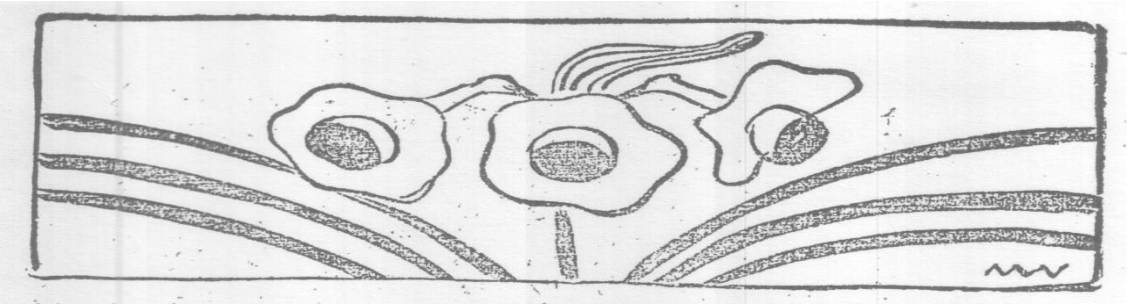

國の男

水野仙子

縣保子が下谷の西町に下宿を定めてから、彼れ是れ十日近くになつた。仕事先の根津には此處から三十分もあれば緩つくりなので、今までのやうに慌てゝ朝起きをする必要もなく、熟すやうに目が開いてから起き出して、顏を洗つて身じまひをする。それから御飯を喰べてそろ〳〵出掛けるという風で、電車賃の儉約を實行されることも、此處に移つた理由のうちの一つであつた。

それは保子が故郷を出てから三年目に數へられる四月である。ほろ〳〵と散る櫻に慄へて遣瀬ない胸を抱き餘したその日頃も、一日〳〵と色增して行く葉櫻の色に鎭められて、土地の落着きと共に少しく心の餘裕を生じて來た。

夕方の忙しさにも、今は係りあふ體でないところから、わざと遠廻りをした

り、近道を探したりして、違つた道を歸つて來るのが好きであつたが、ふと昔の夜初めて上野に着いた時に、車で通つた街の賑かな印象を想ひ起して、それが何處であつたかを確かめようとする好奇心が湧いた。で毎日心掛けて心覺えのあたりをぐる〳〵廻つて見たが、どうも三年前の夜に目に映つたやうな街は見當らない。それがどうやら上野町らしくはあるけれども、さう決めてしまふのにはあまりに今の上野町が見窄しかつた。

或晩、保子はつく〴〵獨りで喰べる御飯の不味さを味はひながら、何處からともなく聞えて來る尺八の音に、居堪らないやうな春の夜の氣分をそゝられて、衣紋竹に懸けてあつた羽織を引かけざまに草履を穿いて表に出た。若しもそのまゝ六疊の部屋に凝乎(ぢつ)として居ようものなら、障子に映つた自分の影が、髪の毛の搖れたのにさへ大袈裟な表情をして、見る〳〵部屋一ぱいの姿となり、ものも言はず後から攫みかゝるやうな氣がされて、それを遁れたやうな心安さを保子は覺えるのであつた。

何處へといふ當でもなくいつも家を出るので、足に委せた氣分は、耳や眼に入る光りと音と”もそれの持つた誘惑を拒まうとはしなかつた。しつとりとした大地に觸れては離れる草履の音が、快よく踵を打つて、褄先あたりに生暖い風を漂はす。ふと保子は、三年前の田舍娘の持つて居た單純な驚きの目が慾しくなつて、叶はぬまでもそれを試みようと上野の停車場さして雜閙の中にはひつて行つた。

忙しく働いても、今探すものゝ外には見る事の出來ぬ眼を持つた澤山な人達が、いづれも顏の筋肉を緊張させて、出逢ひ頭に突き當る人々を避けて動き廻つて居る。建物の中に限られた物の響きが谺(こだま)をか

へして、籠つた濁音となつて隅から隅に彈き合つて居る。時間の絶對な權利に慴えて、不安を漲らした群集の間を縫つて歩いて、保子はやはりつけ馴れた自分のお白粉の匂ひを嗅ぐより外はなかつた。着物の柄にも着こなしにも、少しは都の風俗が窺はれるのが、此上もない滿足でありながら、何か充たない心の空虚は、却て昔の田舎娘が充たして居た。古ぼけた行李一つを蹴込みに置いて、麹町へと運ばれて行く車の上から見た東京は、今でも一つの幻影となつて存在して居る。

保子は場内を一周りすると、車寄せの方から心覺えを辿つて、眞つ直ぐに上野町へとはひつて行つた。狹い道幅に照らし餘した瓦斯の光りが、小急ぎに通る女達の顔を白く美しくして見せて居る。化粧品店の娘の桃割れや、煎餅屋の内儀の櫛卷など、とり〴〵に女の美しさに輕い妬みを覺えながら、軒に吊した古着のかげから冷かしの客を呼びに出た生白い顔の番頭に顔をそむけて、保子はぶら〳〵と取り止めもなく歩いて行つた。夜はさすがに灯の光りに扮飾されて美しいけれども、嘗て瞥見して去つた此町はもつと夢のやうであつた筈だ。

通りを出外れようとした右側の二軒目は、ふと見ると裁縫店があつた。硝子戸を嵌めた店先では、四五人の職人が裁板を圍んで、電燈の紐を低く下げて頻りに針を運かして居る。其人達の膝に散れて居る友禪や赤い絹裏が、春の夜には相應しく嬌かしかつたので、何の氣なしに立ち止まつて其微かな搖ぎに見入つて居ると、ふと一番手前の端れに仕上げをして居た男が顔を上げた。と思はず保子は、

『あら！』と言つた。と同時に國の近所に居た男が、上野停車場附近の仕立屋に弟子に行つたといふ話

しの舊い記憶が喚び起つた。

中からは暫く怪訝さうに瞳を凝らして居たが、保子の笑顔が硝子戸近くに寄つて行くと、思ひ出したやうに會釋をして、胡座のまゝ手近の硝子戸を開けようとしたが、起ち上つて前掛けを叩きながら、裁板を股いで表に出て來た。

『暫くね。』と保子は、職人たちがちら〳〵胡散臭さうに目を放つて居るのを、輕い微笑で受けながら言つた。

『……』男は暫くして唾を一つ飲んで、

『し、暫く。』と突き出すやうに言つた。

と保子は我にもなくにつとして、

『まあ思ひ掛けなかつたのね、こんな所に居らしたんですか。』と言つてげら〳〵笑ひ出した。そして慌てゝそれを紛らすやうに、『ほんとに思ひ掛けなかつたわね、まあ……。』

保子にはすつかり此男に就いて忘れて居たことが可笑しかつた。此男は子供の時から名うての吃りなのであつた。

『い、いつ、こちらに出て入らしたんです？』

『さうね、去年――一昨年（をととし）よ今ではもう。』

『い、今、ど、どちらに居らつしやるんですか？』

『つい此近所よ。西町なの。遊びにいらつしやいな。』

かう言つて保子は、帶の間から鹽瀬の赤い名刺入れを出して、小形な一枚の名刺に下宿の番地を裏書きして渡した。

『晝は毎日出てるけれど、夜なら大抵家に居ますから、いつでも遊びにいらつしやい。』

『ぢやさよなら。』

『さよなら。』

『ほんとに遊びにいらつしやいなね。』

保子はくるりと踵をかへした。店の者達が變な眼で見て居たのが、可笑しくもあれば片腹痛くもあつたが、あの名刺を見たらさぞ驚くだらうと、得意の微笑を洩しながら歩き出した。無智な人達に、女の雜誌記者といふやうな名が、どんなに縁遠く量り知られぬものに現るであらうと思ふと、一枚の名刺を手から手に移して覗き合ふ職人達に、友達顔に説明するあの男の、少し足らなさうな顔を想ひ起して莞爾とした。引いてはあの男の口から我儘者扱ひにして居た國の者達に、自分の成功が輪を掛けて吹聽されることがあるかも知れないと思ふと、餘計に晴々とした氣分になつた。空想は又打算の上にも走つて、手廻り兼ねて居る縫物を、手傳つて貰ふことも出來ようし、その代りにはあの男の心置きない遊び場所ともなつてやらうなどゝ考へた。

保子は新しい一つの遊びを見付けたやうな氣になつて、足が向くまゝに浮々として廣小路の灯の方へ

進んで行つた。

男の名は井上政吉と云つた。保子の生れた家の近所の大工の息子で、二度落第した爲めに保子などより級は二つばかり下だつた。少しおつちよこちよいなだけに、人から小用などを頼まれて喜んで居たものだつた。保子が名刺を與へて來た三日目の夜、政吉は夜業を早仕舞ひして保子の下宿を訪ねた。

保子は丁度湯から歸つたところで、身じまひをしたあとの輕い氣分で政吉をあしらつた。宿では店に駄菓子などを竝べて居るので、そのパン菓子を出して貰つたり、其日の歸りがけに買つて來たバナヽなどを薦めた。

『ね、おあがんなさいよ、遠慮してるの？』と、保子は机に頰杖をついて、政吉が如何にも固くなつて居るのを興ありげに眺めながら言つた。

『いえ、え遠慮なんかしません。』

剃りたての角刈りに幾らか男振りを上げて、銘仙絣の袷の袖から、羽二重絞りの意氣な襦袢の袖などが見える。色は相變らず黒いと思つた。揃つた齒並みの汚いのは、親爺似で煙草が好きな故であらう。

『政ちやんは幾つでしたつけねえ？』

『もう、二十四になりました。』

『さう？』と保子は驚いて、『私より二つ下な筈ぢやなかつたの？』

『いえ、あ、貴女も二十四ですか。』
『さう。それぢや同い年なのね。』
保子は政吉があの時分年を隠して居たのぢやないか知らとふと思つた。同い年と聞くと、男といふ感じが浮いて少しく扱ひ難いやうな氣がする。
『もう何年になるの？　彼處(あそこ)に來てから。』
『四年．ら、ら、來年で年期が明きます。』
『さう。いゝわねえ。そしたら國に歸る積りなの？』
『歸つても、つまらないから、どうしようと思つて、か、か考へてるんですよ。』
『さうね、折角いゝ腕を持つてゝも、あんな田舍に居ちやあ手が落ちてしまふでせうよ。それにお金にもならないでせうしね。もうなんなんでせう、兄弟子株になつたんでせう？』
『えゝ、漸くね、去年からいゝ物の仕上げは、親方か、私がやるんです。』
政吉はたて續けに燻らして居た敷島の灰を、生意氣な手付きで叩いて、
『御免なさい。どうもす、すわりつけないもんだから……。』と、とう〳〵堪らなさうに膝を崩して胡坐に組んだ。と、それを機會(きつかけ)にそろ〳〵打ち解けて、
『やつちやんは、え豪いんですね。此處に、かうして獨りで居んの？』
『えゝ獨りよ。』と、保子は初めて政吉が落着かなさゝにして居たのが解せたやうににこ〳〵して、

『氣樂よ。』とつけ加へた。
『こ此間の晩ね、だ誰だかちつともわからなかつたんですよ、す、すつかり變つて居るんだもの。』
保子は我意を得たやうに莞爾した。
『お親方がね、誰だつて聞くから、私の、國の人で、これ〳〵だつて、あ、あの名刺を見せたら、を、を、女で、豪いんだねつて、感心してましたよ。』
政吉は絶えず口をわく〳〵させながら、睫毛の長いしよぼ〴〵した目で、保子のお白粉の浮きた顔を眺めては、見返されると慌てゝ目を伏せた。
『私はね、す、すつかり字を忘れつちまつてね、手紙なんか書くのにほ、ほんとに困るんですよ。是から少し、を教へて下さいな。』
『教しへるなんて、そんなに知つてやしませんよ。だつて政ちやんはあんなに字が上手だつたぢやありませんか。』
『いや、駄目なんです。四年間針ばかり持つてるんだから、み、みんな忘れつちまつて、お、親方に、政吉此字は何つていふんだいなんて、聞かれても、解らないの。こ高等三年まで行つて、わからないことはなからうなんて、い言はれるけれど、全く忘れつちまつたんですよ。』
『そんあもんですかねえ。』と保子は欠伸を嚙み殺しながら言つた。此男に伴つて居た期待が、あまりに平凡だつたのに早くも飽きが來た。無智な世界は色のない砂に同じい。都會の複雜な色彩に眩惑した保

子の生活には、猶且つ爛れるやうな色が欲しかつた。たとひどのやうな結果にならうとも、此男と自分との間に血の出るやうな感情の湧く筈はないのである。もぞ〳〵した口付きも、肩が顰むほどまどろかしい。

『政ちやんは今月給なの？』

『年が明くとね、なか〳〵いゝ月給が、貰へるんだけれど、い、今はほんの小使ひなんですよ。』

『さう、どの位？』

『・・・・・二圓です。た、足りやしませんよ。かうして、煙草を喫むでせう、それがどうしても、二圓になつちまひますよ。それに・・・・・時々は、一杯やりたくなりますからね。』

『ぢや足りないぢやありませんか？』

『そこはやつぱり、如何にかなるもんですよ。内、内職をするんです。あんなところに居ると、自然、馴染みが出來ますからね、政ちやん是一つ縫つて呉れないかとか、やつぱりいろ〳〵ありますよ。一枚縫ふと、銘仙物なら、七八貫は直ぐですからね。』

『へえ、そんなことをしてもいゝもんですか』

『そ、それは、親方だつて、大目に、見て置きますわ。此方だつて、もうこ小僧っこぢやありませんからね。』

保子は思はずにたりとした。横だふれに倚りかゝtうて居た机の上から、手が當つた燐寸を取つて一つ

しうと擦ると、チロ〳〵した焔が見る間に纖細な白い軸を短くして行く。
『つけてあげませう。』と、こんなことが如何にも面白さうに、政吉が敷島の吸口を捻つて居るのに手を延ばす。
『有難う。』と一吸ひ吸つて煙りを吐き出すと、『此頃、清元の稽古に行つてるんですよ。』と政吉は得意さうに言つた。
『へえ！』
保子は擽つたい顔をして、又『へえー』と言つた。
『よくそんな隙があるのね。』それは併し、『よく吃りでも差支のないものね。』とは、さすがに保子も言へなかつたからで。
『今何をやつてるの？』
『今度、北州をやるんです。』
『さう、いゝわねえ。』と言ひかけて、保子はふと輕い氣分になつた。
『淺草ア市の戻りにはア、吉原女郎衆が手毬りつく……。』
『あら！』と政吉は目を丸くした。『やつちやんも習つてるの？』
『いゝえ。』と保子は調戯ひ氣味に薄笑ひして、
『そんな隙があるもんですか。』

『だつて、そ、そんなに知つてるぢやありませんか。』
『聞いてなら知つてるわ。』
保子は少々面倒臭くなつて來た。
『そんなに不粹でもありませんよ。』と輕くかう言つて、無遠慮に小さな伸びをした。
それでも政吉は一向暇を告げようとはしなかつた。これから着物なぞはすつかり縫つてやらうと云ふことだの、自分が年期が濟んだあとの、夢のやうな大きな計畫なぞを吃り〳〵話し出して、部屋一ぱいに滿ちた煙草の煙りの中に、いつまでもぐじ〴〵として居た。
保子は湯に入つたあとの甘い疲れから、ふら〳〵となる頭を腕で支へて、いゝ加減な受應へをしながら、ともすれば快い眠りにひき入られようとして居た。

燃えるやうな躑躅の色から夏の初めは來て不忍の池にぴつたりと浮いた蓮の葉は日増しに大きくなつて行つた。ネルの肌障りが、好いた男の手に觸れるやうな快さを齎して、輕々とした身内に環る血は、皮膚の色にも現はれて來た。
編輯室の机の上に降りかゝる塵に、指の痕がつき出す頃、保子は囚はれた一日から離れて、本郷一帶の空に夕燒けの赤いのを見ながら塒へと歸つて行く。譯もなく先の急がれる日は、朝の出掛に届いた端書の人を待つ日とか、厭な仕事の間にふと思ひついた人を訪ねる樂しみを持つた夕べであつた。親を離

れ、兄弟と遠ざかつて獨り住む女の部屋には、夕闇が冷たく漂つて、たゞ譯もなく泣かまほしい氣分を強ひるのである。水氣の溜つた飯櫃の底に殘つた飯(いひ)を、二つまで盛れば水の徹りすぎた煮魚に早くも口飽きがして、茶の勢ひに掻き流す夕餉※侘びしい。保子が何處へといふ當てもなく、着物などを着替へて表に出るのはこんな時であつた。

政吉は其後も繁々と遊びに來た。縫ひ掛けて放擲つて置いた保子の單衣などを持つて行つて、手際よく縫ひ上げて子僧に届けさせたりして。夜業をしまつてから出掛けて來るので、保子が寢仕度をして居るところに來合せたこともあつた。保子はそんな時に尠からず迷惑を感じながら、歸れとも言へないので、澁々寢間着の儘で對手になつた。政吉の方では段々遠慮がなくなつて、保子が夕冷えにひつかけた羽織の縫ひざまを調べたり、針箱の針が一本となく錆びて居るのを見て、その次には自分達の使ひ針を持つて來て呉れたりした。お召の端切で袋物を縫つてくれる約束もしてある。

保子が近くの氷水屋から苺を取つたり、茶菓子を買つたりすると、眞から氣の毒さうに、

『そんなことをしないで下さい。欲しい時には、自分で買つて來ますから。』と言つた。

それは保子がいつか、月給ではなか〳〵着物まで着ることは出來ないと言つたのから、少しでも自分に關した費を省かうといふ心なのであつた。そして或時は、親方の娘が算術を習ひたいと云ふから、夜の暇にでも教へて貰ひたいと云ふことや、その方で幾らか足しになるやうに取計らうからなどゝ、眞面目になつて言ひ出した。保子がいくら算術などは出來ないと言つても、そんなことはないと信じて居て、

獨り極めに呑み込んで行つた。

いつからか摩利支天の縁日に行く約束をしてあるが、保子は何氣なく歸つて來る道に、植木の市が立つ其日になると、急に用を慥へて家を開けた。

『やつちやんは、なか〳〵、柄の見立てが、上手だね。あの縞は、み、み、みんな、いゝゝ柄だつて褒めますよ。數寄屋町んのかつて言つてやがる。意氣だものね、柄が。私ね、藝者ね、ひ一人二人、知つてるのがあるんですよ、だもんだから・・・・・・。』

『ま、お上んなさいな。』

『いや、今日はか歸ります。あのね、十日にね、おおお大掃除があるから、その晩に來ますよ。その前にね、出來たら届けて、寄越すけれど、い今、少し忙しいの。』

珍しく部屋の縁先に立つてかう言つて居たのは、保子が訪問着の必要に迫られて、無理算段して松坂屋から取つた薄物を、店の政吉にまで頼みに行つた次の日であつた。

『濟まないわね、忙しいのに。でも私、よつぽど自分で縫はうと思つたけれど、毎日出なければならないんでせう。だからいつそ商賣人の政ちやんにお願ひしようと思つてね・・・・・。あとでどつさりお禮しますよ。』

『おゝお禮なんか、要りませんよ、お禮なんか。出來るだけのことはね、力になりたいと、思つてるんだから。』と、如何にも眞面目に言つて、口に手を當てゝ何か考へて居たが、突然、

『昨夜の、着てた浴衣は、よく似合ひますね。素的に若く、見えましたよ。』と言つて、『ぢやさよなら。』と思ひ出したやうに歸つて行つた。

夏に弱い保子には、段々夜だけが待たれる頃となつた。溝板に下駄の音がコト〳〵と繁くなつて來ると、庇合ひの薄暗に行水の音が聞え出して、共同水道の水は絶え間なく迸つて居る。その前後から保子の體に生々とした世が甦つて來るのである。ぼこ〴〵云ふやうな近所の稽古三味線も煩くなく、上野の山の時の鐘が、物語めいて餘情を誘つて行く。

『白地を着て、團扇を持つて、表の涼み臺に行つて通りを眺めます。すると、後から〳〵と人が通る。けれども其うちの一人だつて、私を知つてるやうな顔をして、傍に寄つて來る人もありません。それでも私はなほ、いつまでも〳〵、私の知つて居る顔の見えるまで、通りを眺めて縁臺に腰を掛けて居るのです。私は今夜、さういふ失望を繰り返させないやうに、貴方にまでお願ひしようと思ひます。』

かういふ端書を、保子は十日の朝の出掛けに投函した。それは保子が關係して居る雜誌に、カットやコマ繪なぞを書いて居る年若い畫家へであつた。どうせ政吉の爲めに潰す一夜であるならば、悔いのない時間を費すことによつて滿足したいと思つたのである。

其夕方政吉は仕立物を届けさした。そして一時間ばかりの後に立寄る旨を言傳(ことづ)てた。

保子が湯から歸つて見ると、畫家は來て居た。政吉が見えたのは、それから暫くしてからで、木戸の錠の音が勢ひよくしたと思ふ間に、縁先に現れた政吉は、先客があるのを見ると、見る〳〵其面てに失

望の色を現した。

『いらつしやい！　さあ政ちやんは此方へいらつしやいな。』と、保子は浮々とした調子で自分の傍の方に政吉を請じた。

畫家には政吉を國の者として紹介し、政吉には畫家を少し豪く思はせるやうな口振りで紹介(ひきあは)せた。

磊落な畫家は、政吉などには一向お構ひなしに、さま〴〵な面白いことを話し続けた。政吉は無愛想なお辭義をすると共に、くるりと背を向けて、机の上に披いてあつた雜誌を、見るのでもなく弄んで居る。其心持をすつかり讀んで居る保子が、時々わざと通俗な話に水を向けるけれども、はき〳〵返事をするでもなく默り込んで居る。其癖二人の會話を一語も聞き洩らすまいとするやうに耳を欹てゝ、監視するやうな表情を其顏に泛べて居た。

保子はひとりで乾燥いて居た。自分でも氣の付く程ヒステリカルに乾燥いだ。笑ふやうなことが起る度びに、決つて政吉の方に目を遣るけれども、にこりともしない政吉は、硯箱を引きずり出して新聞紙に徒ら書きして居る。あれ程好きな煙草を喫まうともしない。口も付けない番茶が、赤くなつて底の方に滓を沈めて居る。

初め保子は、政吉が諦めて先に歸つて行くものと思つて居たが、一向そんな氣色が見えないので、段段の樣子から、二人の間に就いて疑ひを挿まれて居るのに感つくと、無智な其頭に甚だしい厭はしさを覺えると同時に、可笑しさが意地惡るく手傳つて、さも戀中でゞもあるやうに見せびらかして、揶揄つ

てやりたいやうな氣になつた。
毒氣のない畫家の顏は、九時の聲を聞くと慌てゝ辭し去つた。保子は態とそれを表まで送つて出た。部屋に歸ると政吉は漸く机の傍を離れて、座蒲團の上に不作法な胡坐をして居た。
『失禮しちやつてね大變。先程は着物を有難う！』と保子は景氣よく言つて、風呂敷包みを引寄せながら、仕立ての出來榮えを見て、
『まあすつきりと出來てるわ。着よささうねえ！　ほんとに有難う。』
政吉はやつぱり浮かぬ顏えおして居た。
『政ちやんはお錢は取つて呉れないし、何をお禮にしたらいゝでせうね。』
『おお禮なんぞ、要りませんよ。及ばずながら、力になつて、やつちやんの、成功を祈つてるんだから。』
と、政吉は何處やら不滿さうな調子に力を入れて、『ああの人、よく遊びに來んの！』
『さうね、たまあに。』と保子は取合はず、
『あゝ、今夜はすつかり興奮しちやつた！』
政吉はそれからくど〳〵と、今夜は保子を誘つて宮戸座を驕る積りだつたことを繰り返して、氣を落しながら間もなく歸つて行つた。
それから一週間ばかり過ぎての夜、保子が寢間着に着替へたところへ突然遣つて來た。絞りの廣口の

筒袖などを着て、雪駄を履いて居た。そして若い一人の男を連れて居る。近所の床屋の若い衆なさうで、これから吉原へ行くのだと言つて、政吉は財布を出して金勘定を始めた。

『ある〳〵。さうら、な、此處に道具があらア。』と何の積りか紙幣を見せびらかして、ちよい〳〵保子の顔を見て居る。

『大變景氣がいゝのね。』

保子はたゞ笑つて居た。何だか此男の爲る事がちつとも解せなかつた。

ぱら〳〵ぱら〳〵と密やかに屋根を打つ雨の音が聞え出した。するとそれで暫く愚圖々々して居たが、やがて傘を貸して呉れといふので、一本きりない蛇の目で、明朝現在困るとは思つたが、早く歸したいばかりに快く貸してやつた。

保子はつく〴〵すべてが煩はしくなつた。

車坂の貧民窟近い露地口に、店を張り出した天麩羅屋の、油の匂ひが胸惡く漂つて、パン菓子屋の店の日除けが、夕日の殘りを力なく遮つて居る。不景氣な八百屋の店に腐つたバナ丶の轉つて居るのから無暗に水を流すので、青苔の生えた魚屋の板の間など、暑さと仕事に萎え切つた保子には、どれもこれも眉の顰められるやうな所を通つて、漸く宿に歸つて來る此頃が五時である。まだすつかり去り切らぬ暑さのうちに、湯屋に驅けつけるのが一つの息つきであつた。夜にのみ生きて居るやうな保子の此頃の

プログラムには、或日又政吉が加はつて居た。

吉原行があつてから間もなくのことで、

『此間の晩は面白かつて？』と保子が冷かした積りで云ふと、政吉はあべこべに怨み言を言ひ出した。それはあの晩あの若衆と凉臺で落ち合つて、ふとしたことから廓の話になり、勢ひ繰り出さうといふ段取りになつた。ところが政吉は若衆が無一文なのを見拔いて居たので、勘定は自分が持たねばならず、それが何日になつても取れる見込みのないことを經驗して居るから、如何にかして調子を外さうと考へた。で思ひついて保子の所へ行き、面白く話して別れようと思つたのであつたさうだ。ところが旨い工合ひに行かなかつたので、金でも見せびらかしたら、さすがに保子も留めるだらうと、要もないのに財布を引き出したりして、留めて呉れるのを待つてたのであるさうな。

『だつて政ちやん、いつかそら、あんたが吉原に行くのも附き合ひだから仕方がないつて言つてたぢやありませんか。だもの、私はあの晩だつてさうだと思つたわ。それを止めるのも不粹だらうぢやありませんか。』

保子は政吉があまりの眞面目さに、腹を抱へる譯にも行かず、たゞ苦笑するより外はなかつた。

『いえ、附き合ひも、割前ならいゝけれど、つまりませんよ、あゝんな奴に、たゞ出して遣んのは・・・・。』と政吉は慌てゝ辯解した。そして暫く何か考へてる風だつたが、やがて憚るやうに、

『やつちやん、此間、いゝつて云つたこと、ほんとにいゝの？』

『何が？』
『こゝで、お酒を飲んでもいゝつてこと。』
『あゝさうね。』
保子はさつと厭な顔をした。それは政吉からいつか、料理屋に行つては金が要るので、差支へがなかつたら此家で飲まして呉れないかち言はれた時に、別に大したことゝも思はなかつたし、まさかとも云ふやうな氣持ちから、うつかり宜い加減の挨拶をして置いたのであつた。
『全く、料理屋に行くと、い、い一兩二兩は直ぐ飛んでしまひますよ。女にだつて、傍に附いてられりやあ、五十錢位投げてやらなけりやなりませんしね。』
保子の人の好い一面と、今は少し棄て鉢氣味の氣分が合致して、斷り切れず承知をすると、政吉は喜んで表に出て行つた。
保子はほつと溜息をして、机に倚りかゝりながら、政吉に就いての今までを振りかへつて見た。利用するには、利用され得るものから、又それだけの犠牲を要求されて居るのであつた。弱點の握り合ひにも等しい、利益の交換！　何といふ馬鹿々々しいことであらう！
『お待遠さま！』
ぴくりとして首を擡げると、それは酒屋が德利をコトリと縁先に置いて行つたのであつた。見馴れぬ其男の意味ありさうな目に出つ逢すと、妙な聯想を喚び起して、不思議にも後めたさが胸一つぱいにな

つた。

『お待遠様！』

續いて魚屋が刺身を届けて來た。保子の胸は益々隱かでなくなつた。自分から仕出來したことゝは言ひながら、何といふ侮辱であらう！

政吉は間もなく戻つて來た。そして懷から新聞紙に包んだ小笠原産のバナゝを取出した。保子の喰べるものにといふ積りなのである。

保子は仕方なく宿の小母さんを呼んで、お膳と杯と箸とを貸して貰つた。政吉はお燗をして貰ひたさうであつたが、潔癖家の小母さんが、鐵瓶の中に入れることを拒んだので、政吉は冷たいのを貧乏徳利のまゝで、ちびり〳〵と遣り出した。それを小母さんが、横目で見て居るのにも保子はハラ〳〵した。

越えて二日、煩さゝに弱り切つて居る保子のところへ、政吉は鬱金の風呂敷包みを一つ預けて行つた。淺草に行つて來るから、明日の朝まで預つて置いて呉れといふのである。中は披いても見なかつたけれど、手觸りは古著物らしかつた。

保子は遂々堪へられなくなつて、その朝小母さんに圓く遠ざかつて貰ふやうな言傳てを賴んで、早くから家を出てしまつた。

風通しの惡るい編輯室に一日閉ぢ籠められて、夕方眼の大きくなつた顔をして歸つて來ると、小母さ

んは待ち構へてたやうに保子を摑へて、

『ね縣さん、言つて遣りましたよ。縣さんは忙しいんだから、さう〳〵度々來られちやあ勉強が出來やしないつてね。お前も男なら、女一人のところに、あんまり遲くなつて來るのは愼むものだ。おまけにお酒なんぞ飲まれちやあ、家で淫賣宿でもしてると思はれて甚だ迷惑だ。縣さんにしろ、嫁入り前の大事な體だから、そんな噂さを立てられた日にやあ甚だ以て迷惑だつてね、さう言つてやりましたよ。そしたらね、縣さん、奴(やつこ)さん大變謝つてましたよ。大きに惡うございましたつていふから、大きに惡るいも何もないから、是から少し遠慮して貰ひたいつてね、びし〳〵やつつけてやりましたよ。』と、得意になつて說きたてた。

さうまで露骨に言つて貰ふ積りはなかつたのだけれど、言つてしまつた以上は仕方もない。常から保子のところへ來る澤山な友達のうちに、自分の好き嫌ひを定めるやうな小母さんであるから、腹立ち紛れに何も彼も言つてしまつたのであらう。と、保子は氣勢(きほ)ひたつた小母さんから、がみ〳〵怒鳴りつけられて、悄々と歸つて行く政吉を目の前に見るやうな氣がしてさすがに氣の毒さに堪へられなかつた。それに、却つて自分が怨まれやしないかとそんなことも心配になつた。

小母さんはよつぽど政吉が氣に喰はなかつたものと見えて、猶いろ〳〵に言ひ募つた。

『ね、縣さん、誰だつて訪ねて來るのに、『縣さんいらつしやいますか』つて』さういひますよ。それだのにあの奴、『居ますか?』かうだ。さうしてぐん〳〵通つてしまひますからね。何日か小つ酷く叱つて

やつたんですよ、あゝ縣さんの留守ん時さ。「おい！　誰だ、人の家へぐん〳〵はいつて行くのは」つてね、ほんとに好かない奴さ。』

心に懸りながらも、さう言つてしまつたものを、今更どうにも出來ず、保子はぐづ〴〵に忘れ去らうと心に務めた。

翌日の午後、四五通の投書の中に交つて、一封の手紙が保子宛に編輯局に届いた。井上政吉といふ下手な字が目に注くと、保子はあまり快い手紙でないことを直感した。切手が二枚も貼つてある程長い卷紙だつた。冒頭から讀めない字に出つ會しながら、片假名と平假名を交ぜこぜにした、當字澤山な文句を判じ〳〵讀んで行くと、それは皆怨みの言葉であつた。こんなにまで字を忘れてしまうものかと思はれる程、間違ひだらけであつた。それに依つて見ると、小母さんは髪を結ひながら、丁度はひつて來た政吉に唾みかゝつたものらしい。『世間あるきの髪結ひ風情の前で辱めなくとも、保子自身から注意して呉れたなら、どんなに嬉しからうものを』といふやうな意味のことが、繰り返し〳〵言つてある。そして其日は、家に歸ると仕事としないで寢てしまつたことや、惡意あつて要らぬお世話をしたのでない事を、廻らぬ筆で辯明してある。

あまりに小母さんの高飛車が利き過ぎたらしいので、保子は讀んで居るうちに只管氣の毒になつて來た。此後何處に越すやうな事があつても、居所だけは知らして呉れと添へ書きしてあるので、何處までも不思議な絆を曳かうとすることが、厭はしくもあつたが又可憐でもあつた。

たゞ一箇所どうしても判斷の出來ぬ所があつたので、暫く眉を顰めて考へて居たが、ふと思ひつくと、保子は思はずぷつと失笑してしまつた。そして獨りでお腹を縒つて笑ひ轉げた。それは、『貴方とふふになるつもりはありませんでしたが』とあるので、ふふとは夫婦の積りなのであつた。其露骨な表現の言葉に、すつかり興ざめのした保子は、當り障りのない緩和な返書を認めて、早速添へ書きの通りにその手紙を送り返した。

蒸すやうな日が二三日續くと、保子は一堪りもなく痩せてしまつて、ともすれば仕事の方も休み勝ちになつた。何處へか遁れたい、遁れたいとは思ひながら、獨り立ちの女の足と手は、丁度糊づけにでもされたやうに、燬けるやうな都會を離れることが出來ないのであつた。

編輯間際の忙しさに、つい夜更しをしたのが障つて、輕い腸加答兒を起した保子は、一日江戸櫻を貼つた顳顬を押へながら、机に頰杖をついて、凝乎と海から來た畫家の便りに見入つて居た。そこへ十二三の小僧が、結び文を持つて木戸口からはひつて來た。それは政吉からの使ひで、『貴女も氣持ちが惡るからうから、それではいつぞやの仕立賃を、九十五錢だけ頂きます。此者にお渡し下さい。』といふ意の文面であつた。

保子は蟇口から一圓の紙幣を拔き取ると、この手紙にくる〳〵と卷いて、默つて小僧に手渡した。そして、これですつかり帳消しになつたといふやうな、晴々とした氣分になつた。

【入力者注】（数字は底本の頁 - 行です。）

54-2　金勘定を初めた。→金勘定を始めた。

54-3　此處に道眞が　→此處に道具が

55-6　見込みのないこを　→見込みのないことを

底本：「中央公論」大正二（1913）年七月號

入力：小林　徹

公開：令和四年一月三十日

最終更新日：令和四年五月十七日

水野仙子「作品年譜」に戻る

謝辞：底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。